

MAY 2022
FREE

RESTORATION OF
PUBLICA



TRP # 01



旧車に想いを馳せたメンバーが集結
パブリカレストアプロジェクトの記録

RESTORATION OF PUBLICA

古いクルマって何であんなにカッコいいんだろう。ノスタルジックな雰囲気。あの個性的なデザイン。いつかは乗ってみたいなあ！なんて、そんな憧れをあなたも一度は抱いた事があるのではないのでしょうか。旧車には、人が集まってくる魅力があると思います。そのクルマに乗って、ひとたび街に繰り出せば思いもよらぬ出会いが舞い込んで来ます。懐かしいなあ〜と声をかけてくるおじさま方。かわいい！かっこいい！とカメラを向ける若者達。何このクルマ??と振り返る子供や学生達。普段交わる事のない人達とのコミュニケーションがクルマの周りで自然と始まっていきます。その昔、クルマは人が集まる場所だったらしいです。旧車に関しては今も尚、その魅力を放ち続けておりその周りでは、いつでもあの言い知れない一体感が生まれ続けています。「旧車はお金がかかる。」そんな言葉を耳にします。それでも世界中の道で旧車が走り続けているのは旧車乗りによる旧車愛に他ならないと思います。クルマ好きの方々が脈々と育んできた素晴らしい旧車カルチャー。

世代や国境を超えて国産旧車人気を熱をおびる昨今私たちはこのカルチャーに対して、どのように貢献していくべきかを考えなければなりません。そんな課題意識を持った仲間達がココに集まりまずは、自分たちで旧車の復元を行うことで、その課題を探っていく事にしました。こうしてレストアプロジェクトは開始されました。そして、このパブリカ1台をレストアした後、私たちは多くの学びと気づきを得る事になりました。本誌はその活動の記録であり、共に1台を作った皆様への感謝を表した1冊です。

photography, text & edit / Reo Saito

WHAT'S PUBLICA?

誰にでも買えるクルマをつくることが
自動車を通じて社会の役に立つことだ



そんなトヨタの夢は、昭和31年、通産省の国民車構想に応じた試作車（後のパブリカ）の開発で実を結んだ。第7回全日本自動車ショーで注目をあびたトヨタの大衆車は、翌36年、公募によって車名をパブリカと名付けられ、空冷2気筒700ccエンジンを搭載して発売された。経済性が高く、小さなエンジンにもかかわらず高性能で、価格も安かったのが、パブリカは広く親しまれ、日本のモータリゼーション発展のきっかけをつくった。

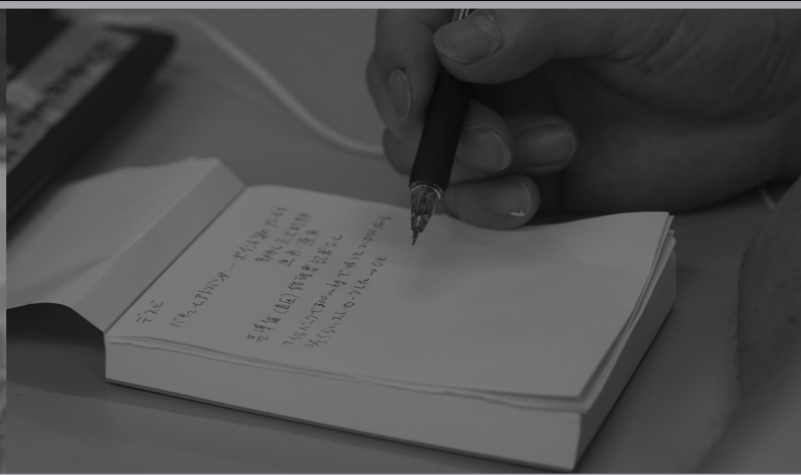
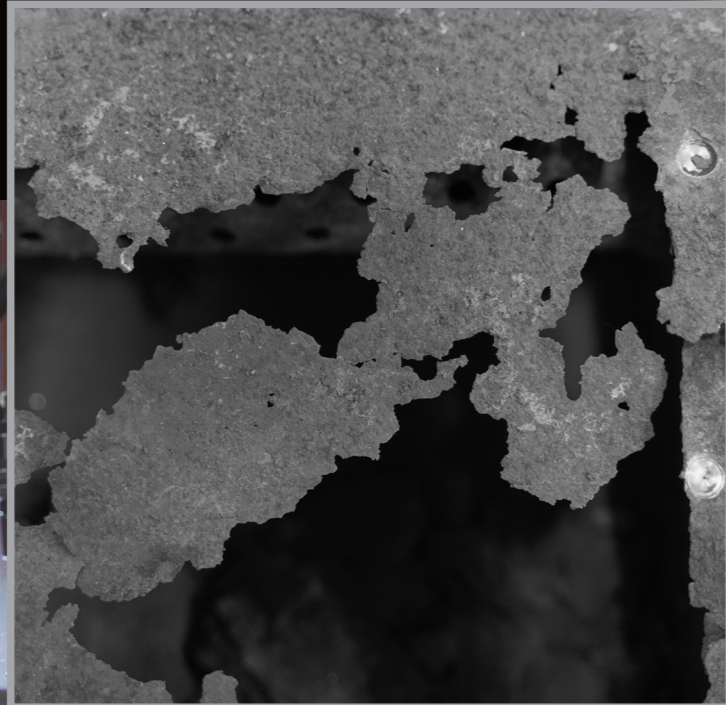
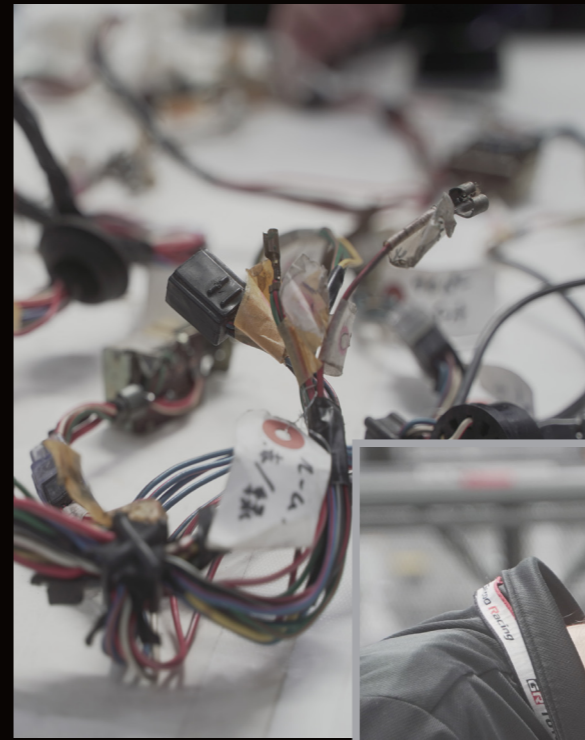


車名公募では連日、深夜におよぶ整理作業を経て、藤浦光、糸川英夫氏らによる審査が行われ、最後は投票で「パブリカ」に決定。

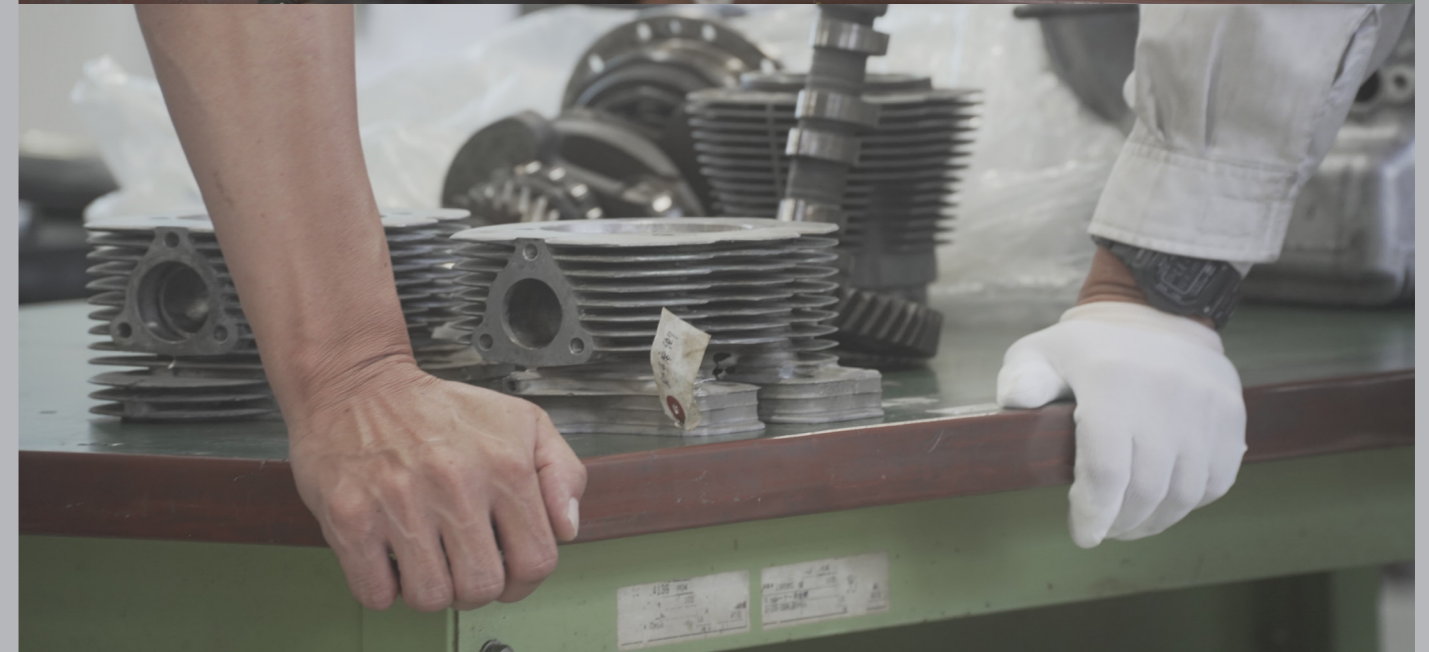
草むらから救った ボロボロのパブリカ

みよし市を通る153号線の片隅にある草むらから、今回の題材となるパブリカをレストアチームメンバである古味が見つけた。ボディは錆びて朽ち果て、どこもかしこも穴だらけのとんでもない車両だ。エンジンには何層にも重なる分厚い汚れがこびりついている。パーツは欠品だらけだし、シートに至っては「蟻のすみか」になっていた。作業をはじめて数日後には、作業場が蟻だらけになっていた事はここだけの話にしておこう。こんな難易度の高さしか感じられないパブリカの前に、プロジェクトを進める作業者達が、トヨタの各工場から手を挙げ集まってきたのだった。スティックなモノづくりで活躍してきたベテラン濱崎SX、自身の技能を高め、挑戦してきた大野SX、確かな腕を持った若手の永原、寡黙な職人肌の上山、トヨタでは右に出るものはない変態級のクルママニアの富安SX、それぞれが得意分野を発揮しながらレストア作業を開始した。しかし、一筋縄ではいかないのがレストアであった。クルマ一台を復元するとなると、各分野の知識と技能が必要になる。私たちは、このクルマをレストアする為には各工場の専門分野の協力、仕入先様の部品製作協力、プロショップからのご指導が必要だとすぐに認識したのだった。そこからは、社内の仲間達と社外の皆様に協力を仰ぐ事で、少しずつ体制を整え、何度も何度も躓きながらではあったが、作業は前へ進みだしていった。










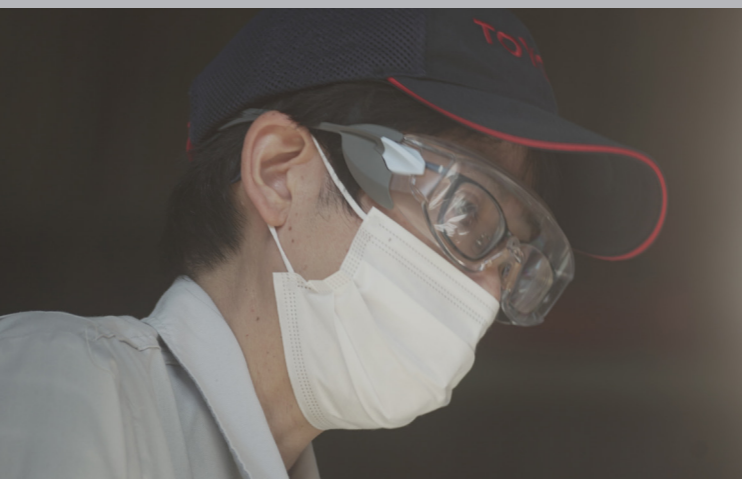




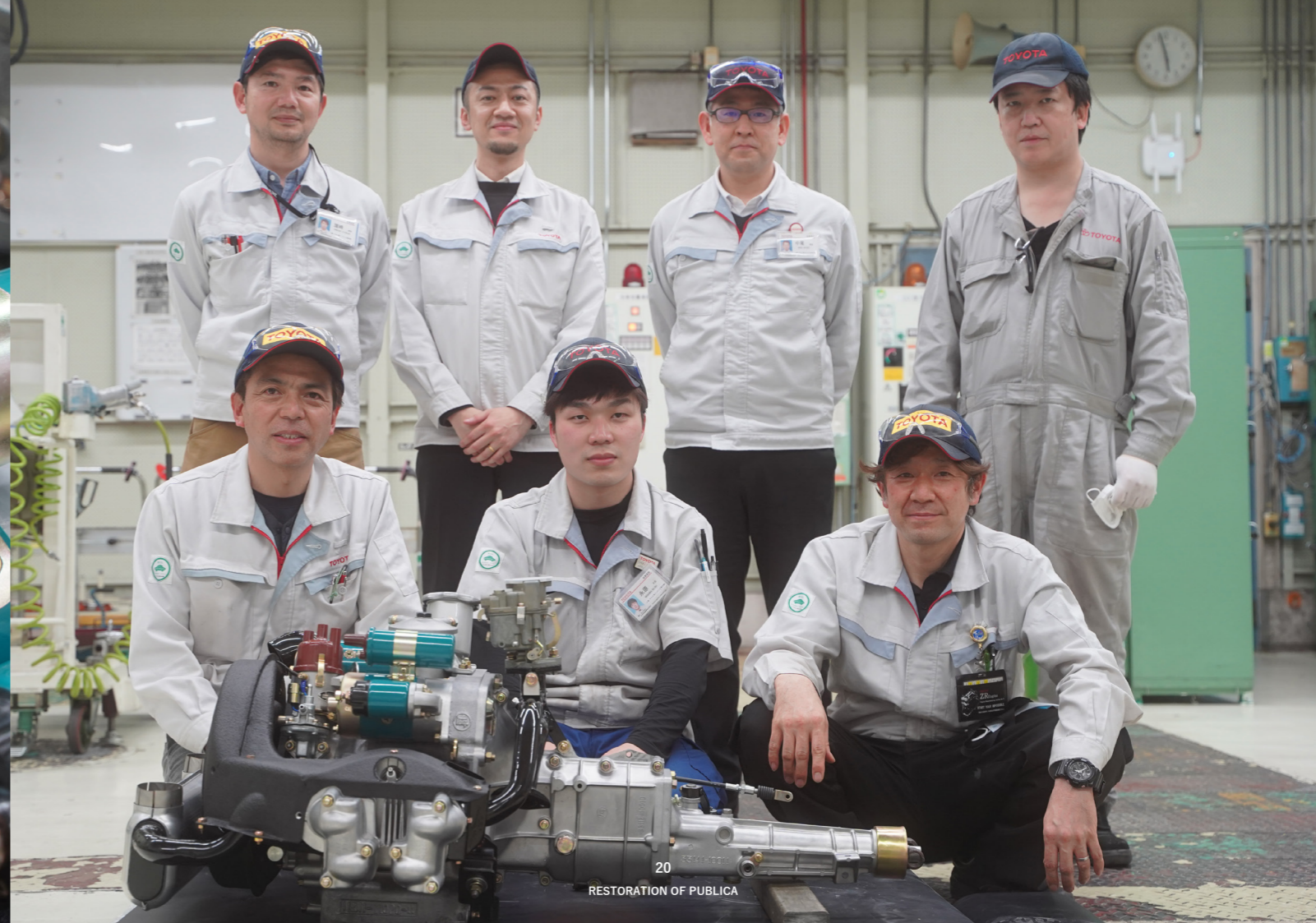
基本技能から応用技能へ

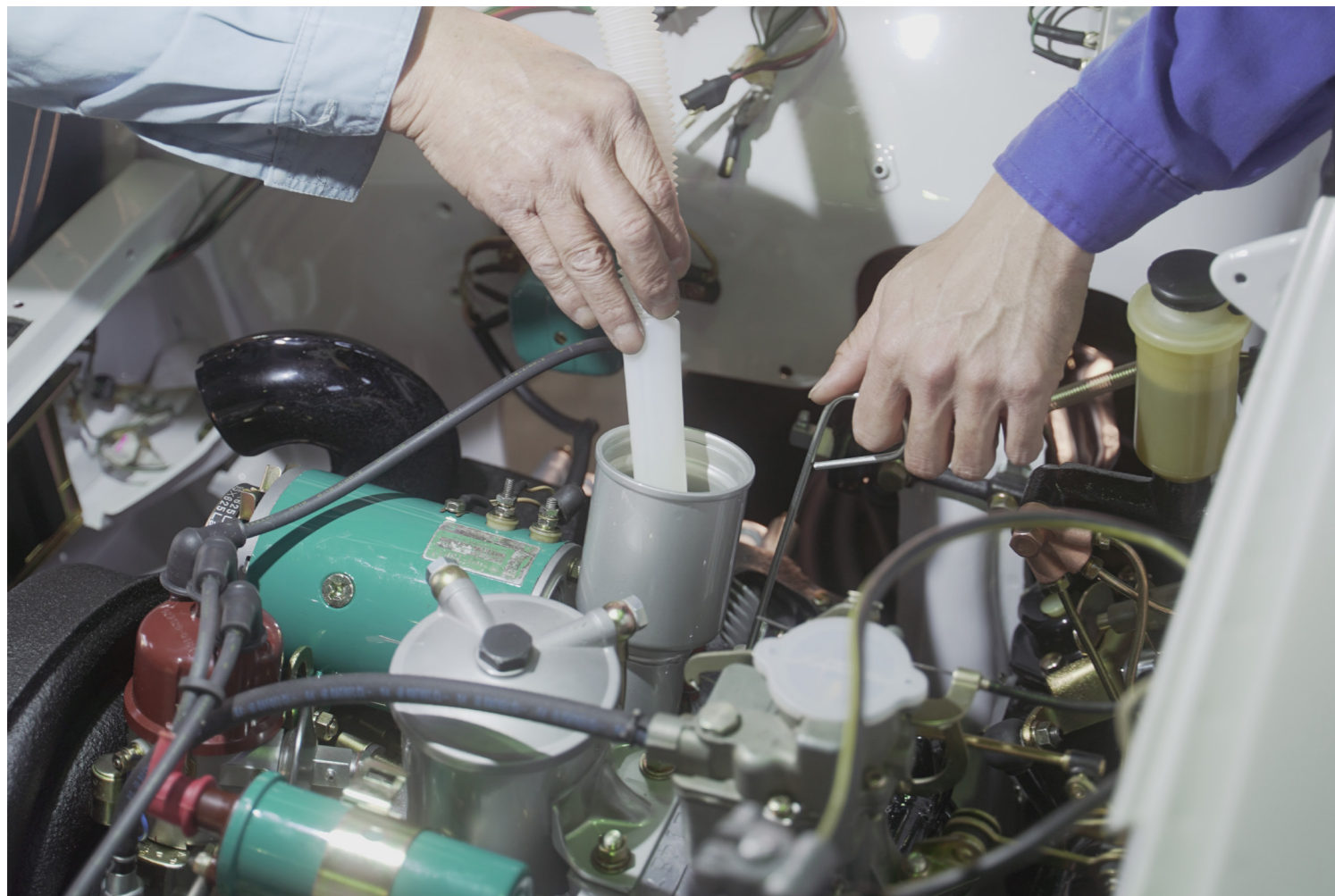
レストアで実現させる高技能の新たなフェーズ

トヨタ自動車の各工場で高め続けてきたクルマ作りの基本技能。それらを活かしながら新たな仕事を進める応用技能の習得にレストアは有効だ。そう語ったのが、田原工場の赤石主幹と鈴木CXの二人。今回のレストアで、ボディを仕上げた高技能者だ。この言葉からレストアは単なるクルマの復元に留まらず、トヨタの未来を担う「人を育てる場」になると我々は確信したのだった。お客様が育てた旧車カルチャーに触れ、クルマ作りの技能でどう貢献できるか。自ら考え、妥協なきモノづくりで対応していく姿を見て、頼もしく思った。トヨタのクルマ作りを支える高技能者達が、未来になっても変わらずクルマづくりで活躍できる場を私たちの手で作っていきたいと思った。









エンジン初点火！

産声をあげたパブリカとクルマ好きが生まれた瞬間

多くの方々のご協力の元、やっと組みあがったパブリカ。あのボロボロだったエンジンは新品の様に生まれ変わったが、本当にエンジンは掛かるのだろうか。部品一つ一つに手を加え、精度も完璧に仕上げてきた自負はある。一方、初めての経験であった為、メンバー全員期待と不安の中、緊張の面持ちであった。しかし、ひとたびセルを回すとエンジンは一気に回りだした。「おあ〜！」「掛かった〜」メンバー一同笑顔がこぼれる。はじめは不安定だったエンジンも、徐々に振動も収まりだし静かで軽やかなエンジンがとうとう息を吹き返したのだ。この瞬間にひとつ悟った事がある。レストアに関わり、エンジンが掛かる瞬間に立ち会う事は、クルマ好きを生み出す事になる。と。実際に、エンジンが掛かった瞬間から、このパブリカへの愛情が止まらなくなっている事に気づく。この活動が広がり、多くの方に経験してもらおう事で、クルマ好きが増えたらなんて素敵なんだろう。苦労しただけあって、本当に感動した瞬間だった。エンジン、ボディ、足回り、全てに手を加えたこのパブリカ。走りも旧車特有のガタつきを感じさせないスムーズな仕上がりになった。



RESTORATION OF PUBLICA





RESTORATION OF PUBLICA

MAY.2022

Producer

kazuya komi / 古味 和弥
kazuya_komi@mail.toyota.co.jp

Photography / Text / Edit

reo saito / 斉藤 礼央
reo_saito@mail.toyota.co.jp

発行

TOYOTA RESTORE PLATFORM

上郷下山工場エンジン製造技術部企画総括室

あとがき

小さなパブリカを題材に、小さく始めたレストアプロジェクト。
クルマは小さいのに課題は常に山積みで、頭がパンクする事が何度もありました。それでも、大好きな旧車のそばで仕事ができるチャンスは2度とないと思っていましたので、何としても次に繋げる！そんな揺るぎない志でやり抜く事が出来ました。心に残っている事は参加された方々からの言葉で、「次も絶対にやらせてほしい」、「ベテランと若手のコミュニケーションに最適である」、「クルマ好きがイキイキ働いている姿が見れてやっていないこちら楽しかった！」等、難易度の高いプロジェクトであったのにも関わらず、ポジティブな声を頂けたのは涙が出る程嬉しい事でした。1台の旧車に人が集まり、笑顔になる光景を道端で何度も見てきましたが、この光景は作り手側にも同様に存在する事がわかりました。旧車の文化と、旧車復元に伴うモノづくりを私たちの力に変えていく事が出来れば、トヨタから世界に向けて新たなワクワクを届けられると確信しています。クルマ好きが集まれば、もっともっと楽しいクルマとクルマライフをお客様へお届けできるはずです。

次のプロジェクトは初代クラウン。日本一のクラウン愛好家から譲り受けた車両を私たちの手で復元して行きます。

ハードルは高ければ高いほど良いらしいですが、コレは高すぎるか！？

斉藤礼央（トヨタ自動車上郷下山工場エンジン製造技術部）

今回のレストアトライでは本当に多くのことを教えていただきました。妥協なきモノづくりを迫り、技能向上に真摯に取り組まれているモータース様、長きに亘りお客様の愛車への想いに寄り添い、サポートされているディーラー様、旧型補給品を生産し続けていただいている仕入先様、お客様の愛車とクルマ文化を守っていただいたのだと実感しました。学ばせていただいたことをこれからの社内活動にも伝えていきたいと思っております。パブリカレストアにご協力頂いた仕入先様関係部署の皆様へ心より御礼申し上げます。

古味和弥（トヨタ自動車上郷下山工場エンジン製造技術部）

